

洪命憲の東京留学時代

波田野 節子

はじめに

洪命憲（ホン・ミョンヒ 1888～1968 号：碧樵・假人・可人・白玉石・碧初）は、生涯にただ一つ書いた未完の長編『林巨正』によって朝鮮近代文学史に名を残した作家である。同時に彼は、植民地時代、左派勢力と民族主義者の統一組織である新幹会結成に重要な役割をはたした政治家でもあった。解放後、北に渡って朝鮮民主主義人民共和国の副首相にまでなったため、韓国において長いあいだ彼の作品は読むことができず、雑誌の復刻版でも名前は伏せ字にされるという状態だった。これは他の越北作家も同様である。だが1980年代に入って思想書籍が解禁されると、『林巨正』も刊行されて爆発的な売れ行きを示した¹。「朝鮮語彙の大言海」³、「朝鮮文学の大樹海」⁴と評される語彙や表現の素晴らしさや、この作品のもつ「民族情緒」²もさることながら、反抗する民衆の立場から歴史を描く作家のスタンスが、民主化の流れにあった韓国の知識人たちに歓迎されたのであろう。1980年代後半からは韓国でも作家と作品に関する研究がはじまった。中でも姜玲珠の精力的な研究は刮目に価する⁵。

林巨正は16世紀に実在した白丁⁶出身の盗賊の名前である。明宗時代、黄海道を中心に広く勢力をはって朝廷に反抗したが、捕らわれて1562年に処刑された。「朝鮮実録」や野談に出てくるこの盗賊を洪命憲が主人公に設定した意図は、連載を始めて半年後に書かれた次のような文章からも推定できる。

「林巨正とは昔の封建時代でもっとも迫害された白丁階級の一人でありました。彼が胸にあふれる階級的〇〇の炎をいだいて、その時代の社会に対して〇〇しただけでも、どんなに壮大な快挙だったことでしょう。その上彼は闘いの方法を知っていました。それは自分一人が陣頭に立つのではなく、まず自分と同じ状況にある白丁の糾合を図ったことです」⁷
(〇〇は伏字：引用者)

硬直した社会を下層民の目を通して描き、彼らが集団となって憤怒と反抗心を社会につける姿を、洪命憲は描き出そうとしたのである。その怒りは、植民地として差別をうけていた朝鮮民衆の憤懣を代弁するものでもあったはずだ。また「糾合」という言葉には、

洪命憲が若い頃から主張していた、地域感情を乗り越えた民族の統合の意図がふくまれていると解釈される。

1928年11月に朝鮮日報に連載がはじまった『林巨正』は、作者の入獄や病気のために数回中断し、1940年「朝光」10月号を最後に未完で終わった。執筆が長期にわたり、かつ時おり中断したため、全体を通して見ると連載開始当初の意図はかならずしも貫徹されたとは言い難いところがある。主人公の性格が前半と後半とで統一を欠いているという意見もあるし⁸、未完で終わったことも作品の解釈を難しくする一因となっている。『林巨正』には『三国志』や『水滸伝』などの中国小説との関連が指摘されているが⁹、幼い頃中国小説を耽読した作者は、長じて留学した先の日本で西洋と日本のさまざまな書物に接し、初歩的な文学的活動を始めたという経歴をもっている。この作品を深度をもって理解するには、作者のこのような経歴の研究が必要であろう。現在筆者は、朝鮮近代文学と日本との関連様相を探るための共同研究に参加して「洪命憲の文学に見る日本との関連様相」という役割を分担している。その一環として、本研究ノートでは、洪命憲が過ごした東京時代に焦点をあてて考察したい。中心となる資料は、洪命憲が1929年に雑誌「三千里」に連載した「自叙傳」である。編集をしている友人金東煥に強く請われて書き始めたというこの自伝は、作者が光州事件関連で検挙されたために2回で中断してしまっただが、さいわい留学時代の終わり頃までを含んでいる。「自叙傳」の他に、洪命憲が書いたいくつかの回想記、そして東京留学時代の友人の回想等を参考にして、洪命憲が初めて近代文学と出会った東京での4年間の軌跡を探ってみたい。

1. 来日まで

洪命憲は1888年7月3日（陰暦5月23日）、忠清北道槐山で、名門両班である豊山洪氏範植の長男として生まれた。洪範植は命憲出生の年に科挙に及第し、内部主事、惠民署参書を歴任後1907年に泰仁郡守となり、錦山郡守として赴任しているときに日韓併合をむかえて自害したことで有名な人物である¹⁰。槐山で幼少期を過ごした洪命憲は、当時一般的であった早婚の風習にしたがって満12歳（以下年齢は満で表記する）で結婚、翌年上京してソウルの北にある自宅に住み、1902年に中橋義塾という新式の学校に入った。当時、名門両班の子弟が学校に通うのは珍しかったが、塾監をしていた人物が祖父の知人であったところに、「時勢に対する眼識のある」¹¹父が、祖父を説得して息子を通わせることしたという。祖父は面白からず思っていたようだが特に反対はせず、通学する孫に毎日二錢五厘の白銅貨を小遣いとしてくれた。こうして洪命憲は1905年の春、日語科を卒業した¹²。この間、1903年に長男の洪起文¹³が生まれ、洪命憲は15歳にして父親になっている。

卒業後、故郷の槐山にもどって漢書を読んでいた洪命憲は、養蚕指導に来ている日本人夫婦が近隣にいることを知り、父に頼んで個人教師として雇ってもらった。日本語を学ん

だといっても日本人に会う機会もなく日本語をほとんど話せなかった彼は、数ヶ月で会話をマスターしたという。以前、日本への官費留学を望んださい家族に反対されて断念したことがある洪命憲は¹⁴、この日本人夫婦が帰国するのに便乗して見物という口実で日本に渡り、そのまま留学してしまおうという計画をたてた。ところが意外にも、見物に行くくらいなら留学した方がよいと父親が言い出し、周囲を説得して祖父の同意も得てくれた。当時は、西洋と違って日本渡航の場合は「護照」（旅行券）なしでも行けたのに、万事怠りなきを良しとする祖父が議政府総務局の外事課から「護照」を発行してもらってきたという¹⁵。日露戦争が終結した1906年、洪命憲は断髪し¹⁶、私費留学生として日本に渡った。日露戦争が始まるとすぐに日本は、大韓帝国政府に対して日韓議定書を押しつけ、翌1905年には第2次日韓協約（乙巳保護条約）によって韓国の外交権を奪っていた。洪命憲が来日した年の2月、伊藤博文を初代統監とする統監府がソウルに開設されている。このあとも韓国はつぎつぎと日本に国権を剥奪されていき、洪命憲が帰国する1910年の夏にはついに併合されるにいたる。

朝鮮を離れてすぐ、洪命憲は日本人による不快な体験をしている。雇われ教師として彼に日本語会話を教え、このとき日本まで同行した日本人の態度が玄界灘で豹変したのである。それまでとは違って「きみ」とか「洪君」と気安く呼ぶようになり、他の日本人に朝鮮の悪口を平気で言い散らすので、横で聞いていて耐えられなかったという¹⁷。それまで名門両班の長男として育った彼にとって、味わったことのない屈辱であったことだろう。この日本人の態度の背後には、日露戦争に勝利して「一等国」の仲間入りを果たしたと自負し、朝鮮を保護国化したばかりの日本の驕りがあったと思われる。洪命憲の日本滞在は、このような時期に行われたのである。

2. 東京到着

洪命憲が日本に来たのが1906（明治39）年の何月であったかははっきりしない。この年に東洋商学校予科に編入学していることからして、おそらく年の初めだったと想像される。釜山から船に乗り、瀬戸内海を通過して大阪で下船し¹⁸、三、四日逗留してから汽車で東京に着いた洪命憲は、新橋駅前の旅館に何日か宿泊した。そのとき退屈しのぎに旅館の主人の息子から借りて読んだのが短編小説との初めての出会いで、漢文小説と違って初めと終わりが無いのが物足りないけれども面白い、というのが第一印象だったという。旅館は費用がかさむので、まもなく「本郷のとある旅館兼下宿」に移り、そこに半年あまり住んでから、その後は日本でできた友人たちと一緒に一軒家を借りて住んだ¹⁹。当時、仲間と共同で一軒家を借りて飯炊き女を置くのは、留学生だけでなく日本人の上京学生にも見られた生活形態である。

下宿に移り住んだ頃そろそろホームシックにかかり始めていた洪命憲は、女中から同国

人が同宿にいると聞いて喜んだ。それが文一平²⁰と李光洙であった。李光洙の方でも、「本郷区元町の玉眞館」に住んでいたときに銭湯で洪命憲に初めて出会ったという逸話を、ある座談会で語っている²¹。明治39年の本郷区元町は現在の文京区本郷1，2丁目のあたりで、いまは元町公園がその名前をとどめている。水道橋をわたると神田区三崎町（現在の千代田区三崎町）で、左角に洪命憲が中学入学準備のために通った東洋商学校があり²²、同じ並びのもう少し先に大成中学があった²³。

3. 中学校入学

洪命憲が大成中学を選んだ理由はいたって単純で、下宿の主人が、自分は大成中学の経営者と同郷だから世話してやると言ったためだという。また東洋商学校の予科に通ったのは、そこが大成中学の経営者によって経営されていたからである。だが、数えて19歳になっていた洪命憲が自分より年若い中学生たちと一緒に勉強しようと思立ったことには、彼なりの思慮が働いていたと思われる。「自叙傳」には次のように述べられている。

「次第に故国の人たちと多く出会うようになり、勉強のことを訊ねると、だいたい明治の法科か早稲田の政経科に行けという人が多かった。だが私は速成するために苦勞する必要がなかったので、中学校からやっ払いこうと決め、中学校に入学する準備を始めた」²⁴（下線引用者）

「速成」という言葉は、中国でこの時期さかに行われていた「速成教育」を想起させる²⁵。1900年代に入って中国で教育の近代化をめざして行われた「速成教育」は、廃止される科挙の代用品としての留学という現象を生み出し、東京にはこのころ中国からの留学生が大挙して押し寄せていた²⁶。すでに1894年の甲午改革で科挙が廃止されていた朝鮮でも、日本留学を立身出世の道と考えるのが一般的であり²⁷、それには法律と政治を学ぶのが最適とされていた。洪命憲の父親も息子に「法律をやれ」と言ったという²⁸。それなのに彼が「速成」の道を選ばず、じっくりと中学校からの課程を踏もうと決めたのは、なぜだろうか。中学校から始めた理由について、洪命憲は次のように語っている。

「留学生たちはたいてい専門部か、でなければ大学に入ることでしたが、私は日本語を徹底的に学んで新学問を基礎からやるために中学校に入りました」²⁹

「新学問を基礎からやる」という言葉には、彼の研究者的な資質が多分に反映しているように思われる。洪命憲が多読家であったことは有名で、それもあらゆる方面にわたっていた。のちに東亜日報のコラムに連載した『学窓散話』で彼は、古今東西の歴史・科学・

言語・民俗学など、じつに多彩な領域にわたって蘊蓄をかたまけている。また、『林巨正』の中でも巫覡や民話などに関する描写や説明はまことに詳細である。同じ対談で彼は、自分は自然科学をやりたかったと語っている。洪命憲は立身出世のための学歴よりも、「新学問の基礎」すなわち自分がそれまで積んできた東洋文明の素養とは異質である西洋文明を、根底から知ることを望んだのだと想像される。

ところで、前述したように、洪命憲は家の反対で官費留学生の選抜試験を断念したことがある。これは1904（明治37）年に行われた韓国皇室留学生のことをさしていると思われるが、この時派遣された留学生たちの多くは、法律と政治を学ぼうとする「速成」志望者だった³⁰。彼らは故国で近代教育を受けていないため、とくに数学・理科の素養に欠けており、高等教育準備のための受け入れ先であった府立一中の校長が、彼らを無能者よばわりするという事件が起こった。校長は報知新聞のインタビューに答えて、朝鮮人には高等教育は無理だと侮蔑的に語り、記事に憤激した留学生たちが同盟休学をして全員退学させられたのである³¹。1905（明治38）年末におきたこの事件の背景にあったのは、日清・日露戦争勝利後の日本に蔓延していたアジア軽視の風潮だった。同じ時期に中国から来ていた留学生たちも、この風潮にはさまざまな形で心を傷つけられている³²。翌年初めに来日した洪命憲は、当然この事件を耳にしていたことだろう。彼は、東洋商学校予科2年生に補欠入学すると、通学のかたわら数学講習所と英語講習所に通い、その一方で鉱物学と植物学の個人教授を受けるという万全の準備をしている。中学試験準備のあいだは、食事と睡眠の時間をのぞいて教科書に没頭したという。1907（明治40）年春、洪命憲は優秀な成績で大成中学3年生編入学試験に合格した。彼はこの中学で卒業直前までの3年弱を過ごすことになる。

4. 学校生活

洪命憲はのちに崔南善・李光洙とならんで三天才と呼ばれたほど、頭脳明晰で知られた人物である³³。ソウルでは、中橋義塾に入学した最初の学期に2番になったのを除いて常に首席であり、日本でも東洋商学校、大成中学の在学を通じて常に1番か2番だったという。だが彼は日本で机にのみかじりついていたわけではない。中学では最初の学期こそ真面目に予習・復習したものの、その後は学業をおろそかにするようになり、文学に傾倒し始めてからは読書で徹夜して学校も欠席がちであった。教科書には手をふれることもなかったが、それでも試験の成績はよかったという。自然科学の教科書を読んで抱いたという未知の領域に対する憧憬、旺盛な知識欲、そして一度読み始めた本はどんなにつまらなくても最後まで読み通す独特の読書方法によってあらゆる領域の書物を読破していた彼には、学校の勉強では得られない多彩な知識が身に付いていたのだろう。後章で考察するが、彼が中学5年生のときに留学生雑誌に書きたいいくつかの文章を見ると、そう推測される。

ところが、このような好成績が学校の教師や学生のねたみを買って、彼は教室で嫌な思いをすることになった。英語の教師は、朝鮮人学生に負けるのは日本男児の恥だと、学生たちをけしかけるようなことを言うし、地理歴史主任は、末は韓国の総理大臣だと嫌みを言ったために、彼はまわりの学生から「総理」というあだ名を付けられたという³⁴。このようなエピソードは、魯迅が仙台の医学専門学校の学年試験に及第したときに、学友たちから問題漏洩の嫌疑をかけられたことを連想させる。魯迅は「藤野先生」の中で書いている。「中国は弱国である。したがって中国人は当然、低能児である。点数が六十点以上あるのは自分の力ではない。彼らがこう疑ったのも無理はなかった」³⁵。魯迅がこの体験をしたのは、1905（明治38）年秋のことである。仙台でも東京でも、日本人学生たちにとっての態度の背後にあったのは、やはり戦勝後の日本の驕慢であった。日本の保護国である朝鮮の人間が自分たちよりよい成績をとるのが、洪命憲のまわりの日本人には許せなかったのだろう。

学校の勉強に興味を失い、学校生活すら苦痛となっていた彼だが、成績がよかったために残った明るい思い出が一つだけある。それは、「萬朝報」の優等生紹介欄に載った自分の写真を、父親が目にしたことである。「萬朝報」の読者である日本人巡査が見つけて父親に贈ったのだという。

「新聞のぼやけた写真であったが、私の父は何度も何度も見直しては喜び、ついに詳しい手紙といっしょに自分の写真を一枚送ってよこした。これは私の終生忘れ得ない自慢の一つである」³⁶

「自叙傳」では写真が載ったのは「3年から4年に進級したとき」となっているが、調べたところ、1909（明治42）年6月4日の「萬朝報」に掲載されていた³⁷。これは洪命憲が5年生に進級した春である。「韓人の秀才」という見出しで、記事には「在留韓人間に秀才の聞え高き洪命憲（二十二）は去る明治四十年三月東洋商学校予科第二学年を終了し私立大成中学第三学年編入試験を受けて好成績にて合格し現に五年の首席を占め居れり洪の父は忠清道の地方官なりと云ふ」とある。洪範植はこのころ忠清道の錦山に郡守として赴任中であつた³⁸。1年あまりのちに、洪範植は日韓併合を迎えて殉死することになる。亡国に向かう祖国の姿に胸を痛めていた父親は、日本人学生をおさえて首席をとった息子の写真を見てどれほど心を慰められたことか。また、自分の成績が父親を喜ばせたことを洪命憲はどんなに光榮に思ったことか。その心情が、「終生忘れ得ない自慢の一つである」という言葉に忍ばれる。

首席で5年生に進級した洪命憲は、1910（明治43）年2月、卒業試験を目前にして突然帰国してしまう。自伝で彼は帰国の直接原因を、自然主義文学作品を読みすぎたための

「肉的思想中毒と神経衰弱」に帰しているが、同時に、「そもそも私が最初に心に決めたとおり勉強できなかったのは、他の大きな原因があった」とも書いている。原因が何であったかは、時代状況を考えれば容易に推測される。当時明治学院中学で学んでいた李光洙は、この時期のことを次のように回想している。

「私が5年生の2学期のとき、安重根がハルビンで伊藤博文を殺したことが新聞に出た。この事件によって日本の新聞の論調は韓国に対してますます強硬になった。日本人同級生たちの我々に対する目つきが険しくなった。我々は日本人が韓国を騙したと言い、彼らは韓国人が日本を裏切ったと言った。我々のような年少者の考えでも、時局が急転直下してもっと大きな不幸が目前に迫っているように思われた」³⁹

洪命憲が東京に来た当初心に決めた「新学問を基礎からやる」ことなど、考えられない雰囲気であった。李光洙はまた、次のようにも書いている。

「ハルビン事件以後、我々は勉強する気を失った。祖国の興亡が危機に瀕しているという逼迫した意識が、我々の心をじっとさせておかなかった。洪命憲君は卒業試験も受けずに帰国した。『卒業なんかして、何になる』彼は私に向かってこんなことを言い、本国に行った」⁴⁰

洪命憲自身も、この頃のことを回想して「とにかく勉強しようという気がくじけてしまった」と、ある対談で語っている⁴¹。こうして洪命憲の日本留学は終わりを告げた⁴²。日本留学は彼にとって最後の学窓生活であった⁴³。自決した父の三年喪を終えてから洪命憲は中国と東南アジアを長期間放浪し、帰国後三・一運動に参加して入獄、その後東亜日報編集局長、時代日報社長、五山学校校長を経て、1927年の新幹会創立のさいには主導的な役割を果たす。長編『林巨正』の連載が始まるのは1928年11月、日本留学を終えてから18年後のことである。

5. 交友関係

洪命憲は東京で多くの友人を作ったと思われるが、ここでは文学関係にかぎって述べる。崔南善と李光洙、そして日本人級友山崎俊夫である。

三・一宣言を起草したことで有名な崔南善（チェ・ナムソン 1890～1957 号：六堂・公六）は洪命憲より2歳年下で、ソウルの裕福な中人の家庭に生まれた。先述した1904年の皇室派遣留学生に14歳にして最優秀で選抜され、府立一中に入学したものの、この時は3ヶ月で退学して帰国している⁴⁴。1906年に再来日して早稲田大学高等師範部歴史地理科

に入学。だが6月に起きた模擬国会事件に憤激して同盟退学する⁴⁵。姜玲珠は、洪命憲と崔南善が知り合ったのは、この第2次来日のときだと推定している⁴⁶。この時、父に懇請して印刷機器を購入して帰国し、1908年に月刊雑誌「少年」を創刊、1910年には朝鮮の辞書や古典を刊行する目的で光文會を創立した。崔南善の3度目の来日は1909年10月頃で、このとき洪命憲が李光洙を紹介している⁴⁷。崔南善は二人に執筆を依頼し、翌年2月から「少年」には洪命憲と李光洙の作品が掲載された⁴⁸。後述するが、洪命憲は「少年」誌に3編の翻訳を載せており、これが彼の文学領域での最初の仕事である。洪命憲と崔南善はその後長く、かつ親しく交わった。

二・八独立宣言を書いた李光洙（イ・グァンス 1892～1950 号：春園）は、洪命憲より4歳、崔南善より2歳年下である。平安道定州の貧しい家に生まれて、満11歳で孤児となり、1905年に13歳で一進会の留学生として来日した。東海義塾という私塾をへて、1906年春、大成中学に入学。先述したように、このころ「本郷元町の玉眞館」という下宿に住んで、洪命憲と知り合っている。ところが入学してまもなく天道教の分裂のために学費が中断し、彼は帰国を余儀なくされた。洪命憲は翌年の春に大成中学の3年生に編入しているから、もし学費中断がなれば李光洙の1年先輩になったはずだ。この年、官費を得て再び来日した李光洙は大成中学に復学せず、1年跳び級をして明治学院普通部（中等部）3年生に2学期から編入した⁴⁹。これで2人は同じ学年になったわけである。

2人は期せずして同じところに文学に傾倒するようになったが⁵⁰、李光洙は洪命憲のことを自分の「文学の指導者」であったと回想している。洪命憲が自分の買った本をつぎつぎと李光洙に回して読ませていたからだ。実家が名門両班の洪命憲は、経済的に余裕のある留學生生活をおくっていた。父から月25円の仕送りを受け、その他に50円100円と貰っていたので、本も買えない他の留學生よりましだったと語っている⁵¹。李光洙ももちろん好きな本を購入することなど無理な境遇だった。洪命憲は自分が買った本を李光洙に読ませ、他には文学に熟をあげる留學生などいない状況の中で⁵²、2人はかなり親密につきあっていたようである⁵³。

卒業後、李光洙は故郷に帰って教員となり、1913年末に大陸放浪の旅に出て上海で洪命憲に再会した⁵⁴。帰国後再び来日して早稲田大学に入った李光洙は、1917年に朝鮮近代文学最初の長編小説『無情』を発表して一躍有名になった。シンガポールにいる時それを読んだ洪命憲はあまり感心しなかったらしく、率直な意見を葉書で送ってよこして李光洙をがっかりさせている⁵⁵。のちに李光洙の方も『林巨正』については無視に近い冷淡な態度をとった⁵⁶。若いときの親密さはその後の2人には見られない。だが2人は、李光洙の死の直前に再会することになった。1950年、朝鮮戦争のさなか北に連行された李光洙は、人民軍とともに北上する途中、江界付近で凍傷と肺結核で死亡するが、死の直前に洪命憲が駆けつけたといわれている⁵⁷。

最後に、洪命憲と李光洙の2人と友人だった特筆すべき日本人、山崎俊夫（1891～1978）について述べておく。盛岡で生まれた山崎は、盛岡中学にいたとき父の勤務の関係で上京して大成中学に編入し、3年生のとき洪命憲と同級生であった。そのあと4年生から明治学院に転校して、今度は李光洙と同級生になっている⁵⁸。そのころの山崎はトルストイに傾倒している敬虔な少年で、洪命憲にも李光洙にもトルストイの『我宗教』を勧めたという。洪命憲は仕方なく読んだものの彼を言い負かすために関連書物を読んで理論武装をし⁵⁹、李光洙の方はちょうど木下尚江に夢中だったこともあって、抵抗なくトルストイを受け入れて崇拝するようになった⁶⁰。山崎はのちに慶應義塾に入って永井荷風に師事し、独特な筆致で耽美的な作品を書くようになるが、その中に李光洙を実名でモデルにした『耶蘇降誕祭前夜』⁶¹という作品もある。戦後、ある雑誌に書いたエッセーの中で山崎は、李光洙が独立運動の首謀者として地下に潜ったという噂を聞いても信じなかったが、それは「そんな小さなことにこだわるような彼でないことをわたしは知っていたから」⁶²だと書いている。李光洙は、いくら親しくても日本人に民族の問題を語ることはなかったのだろう。だが山崎の方では2人の間にある壁にまったく気づいてなかったようだ。山崎はまた、「けいべつ」⁶³というタイトルのエッセーで洪命憲と李光洙の思い出を語り、民族差別が自分には理解できないと書いている。朝鮮人留学生とわけへだてなくつきあった山崎は、良心的な日本人であったといえる。しかし彼の小説とエッセーを読むと、彼の善意にすら時代のフィルターがかかっていることを感じないわけにはいかない。当時、アジアから来た留学生たちを傷つけたのは、むきだしの軽蔑よりもむしろ悪意のない傲慢さであったのではなかろうか。

6. 東京での読書体験

日本文学との出会いを洪命憲は「自叙傳」でこう書いている

「3年2学期末休暇のあいだに、偶然古書店に入ってあれこれ本をあさっているとき、巡礼紀行、何処へ（正宗白鳥の作品）、青果集等3冊を選んで買ったことがあった。書店の主人が新刊だと教えてくれた中から書名が気に入ったものを選んだのである。この3冊の本が縁になって、しょうもない古本集めがはじまった・・・」⁶⁴

3年2学期の休暇とは、1907（明治40）年から08（同41）年にかけての正月休みである。徳富蘆花の「巡礼紀行」（警醒社）はそれより1年前の1906（同39）年12月刊行だが、真山青果の「青果集」（新潮社）は1907（同40）年12月刊行だし、正宗白鳥の「何処へ」は早稲田文学の明治40年1月号に連載が始まったところ（4月号まで）だから、まさに新刊である。はじめのうち洪命憲はそれらの本に出ている広告を頼りに、装幀やタイトルの字

体などを評価基準にして手探りで読みすすんでいった⁶⁵。

洪命憲の読書方法は独特で、一度読み始めたら、どんなに面白くなくても中途を飛ばさず最後まで読むことを自らに義務づけていた。面白ければ没頭するし、面白くなければ次の本に移りたい一心で必死に読むのである。他人にわずらわされないよう夜中に読んで昼間は眠り、邪魔が入ったときは便所に逃れて読んだ。ある晩、ツルゲーネフの『浮草』⁶⁶を読みはじめたとき、同居の友人のところに来客があったので、洋灯をもって便所に逃げ込み、とうとうそこで読み終わってしまったという。かなりのスピードである。ペースは1日だいたい1冊で、3日も4日もかかる本はまれだったというから、このペースで試算すると、洪命憲は1908年～09年の2年間で5～600冊の本を読んだことになる。

日本文学では夏目漱石の小説が好きで作品はほとんど読み⁶⁷、当時、漱石が牛込に住んでいたので訪問しようと思ったこともあったという⁶⁸。漱石は洪命憲の来日を前後して「わが輩は猫である」や「坊ちゃん」を発表して有名になり、1907（明治40）年に東京大学をやめて朝日新聞に入社し、世間の注目をあつめた。洪命憲が中学5年生だった1909（明治42）年の秋には満州・朝鮮を旅行して、10月から12月まで朝日新聞に「満韓ところどころ」を連載している。この時期の日本文壇は自然主義が全盛だったので、洪命憲は島崎藤村や田山花袋も読んだというが、特に作品名はあげていない。「若菜集」だけは読み始めて面白くなく投げ出したと語っている⁶⁹。

洪命憲の心を惹きつけたのは日本語に翻訳された外国文学、とりわけロシア文学であった。当時翻訳されていたものは古本新刊をとわずに全部集めたが、中でも一番よかったのがドストエフスキーで、「読み終わって頭がくらくらした」という⁷⁰。トルストイは、この頃は説教くさくて好きでなかったと述べている⁷¹。

このほかには英国詩人バイロンに心酔して、「カイン篇」⁷²からとって号を<假人>⁷³とした。バイロンに対する心酔はそのまま李光洙に伝染し、李光洙はのちに何度もバイロンが自分に与えた衝撃を回想することになる⁷⁴。李光洙は回想録の中で、東京時代に読んだ本のタイトルをあげているので、論者は以前その目録を作ったことがあるが、それらはほとんど洪命憲の読書範囲の一部だったとみなしてよいようだ⁷⁵。

ところで洪命憲も回想しているが、彼が日本で本を読みあさった1908～09（明治41～2）年は、日本文学史上、記録的に発禁本が多い時期であった。発禁の種類は、おもに自然主義作品が対象とされた風俗壊乱のほかに、社会思想書の秩序紊乱があった。洪命憲は、親しくなった本屋の主人のおかげで、その両方の類の発禁本も入手している。洪命憲が記憶している発禁本は『モリエール全集中篇』⁷⁶とクロボトキンの『麵麩の略取』⁷⁷だが、この他李光洙の読書リストにあるアンドレイエフの『深淵』⁷⁸、永井荷風の『ふらんす物語』⁷⁹も1909（明治42）年に発禁になっている。森鷗外の『キタセクスアリス』が掲載されて発禁になったこの年の「スバル」7月号なども読んだと想像される。ちなみに、洪命憲と李

光洙が日本を離れ、大逆事件が起きた年でもある1910（明治43）年に思想書の発禁数はピークを迎え、翌年には風俗壊乱による発禁だけになり、大正期に入ると発禁本の数は激減する⁸⁰。

7. 著作

留学時代の洪命憲の作と確認されているのは、「大韓興学报」と「少年」に掲載された下記の9編である。「少年」の3編はすべて翻訳で、うち2編は帰国後の発表であるが、1編は時期的に見て東京での作と推測されるし、もう1編は前書きに数年来の愛読詩だと書かれているので、ここに入れてさしつかえないと思う。

①「一塊熱血」（「大韓興学报」創刊号，1909.3）②「偶題」（同第2号，1909.4）③「吊裴公文」（同第4号，1909.6）④「原子分子説」（同第4号，1909.6）⑤「地歴上小譚（東西古蹟의一班）」（同第5号，1909.7）⑥「続地歴上小譚」（同第6号，1909.10）⑦「쿠루이로ᄇᆞᆯ譬諭談」（「少年」第3年第2巻，1910.2）⑧「書籍에對한古人의讚美（十三則）」（同第3年第3巻，1910.3）⑨「사랑」（同第3年第8巻，1910.8）

「大韓興学报」は、1909年3月、それまで地方別に分かれて団体を作っていた朝鮮人留學生たちが祖国独立の危機意識のもとに大同団結して結成した大韓興学会の機関誌である。その創刊号に発表した①「一塊熱血」で、洪命憲は地域感情による分派の傾向「地方熱」を李朝時代の党争にたとえ、民族の小部分で行われた昔日の党争とは違って現在の「地方熱」は国全体を滅ぼす危険があると警告して、同胞に「団合」を訴えている。

②「偶題」と③「吊裴公文」は漢詩である。前者は異国で学ぶ心情を詠ったもので「憂国日深心易老」という詩句が洪命憲の心を忍ばせる。後者は大韓毎日申報社長に就任して民族運動を支援したイギリス人ベッセル（裴説）の死に際して捧げた詩文である。

④「原子分子説」は、古代の想像であった原子と分子が、現代では様々な現象を説明する有力な仮定であるとして、かつその応用を紹介したものだ。自然科学の内容を自分の言葉でいかにも興味深そうに書いているのが印象的である。同じく⑤⑥「東西古蹟의一班」では、エジプトのピラミッドやフィラデルフィアの独立閣、パリの凱旋門など世界の名所について歴史を織り込んで紹介し、後半で、ソウルの塔洞にある十三層塔の由来を朝鮮、西洋、日本の資料を整理しながら探って、それが世祖代のものであることを考証している。このころ学校で勉強を真面目にしなくても試験では好成績を出していたというのも当然と思わせる水準の文章である。

「大韓興学报」では本名の他に碧樵の号、欲愚生、MH生などの筆名を使用していた洪命憲は、「少年」誌では假人の号を使っている。「少年」に初めて載せた⑦「쿠루이로ᄇᆞᆯ譬

「諭談」は、ロシア作家クルイロフの寓話のうちの「蛙と牛」「蠅と蜂」「狼と狐」を訳したものである。冒頭で作家クルイロフに関する説明があり、重訳であることが明記されているが、出典は不明。クルイロフ寓話が日本で単行本として刊行されたのは、論者の調べた限りでは大正3年が最初なので⁸¹、洪命憲は雑誌に掲載されたものを訳したのではないかと推測される。ところで、洪命憲はなぜクルイロフの寓話を訳したのだろうか。洪命憲が訳した3編のうち「蛙と牛」「蠅と蜂」はイソップとラ・フォンテーヌから題材をとったもので、特に「蛙と牛」はイソップの寓話として日本でも非常に有名な話である⁸²。洪命憲がイソップではなくクルイロフの寓話を重訳の対象として選んだのは、彼がロシア文学を好んでいたからという単純な理由もあろうが、それとともに考えられるのは、クルイロフの文章の民族性に対する評価である。洪命憲がロシア文学を耽読していたころツルゲーネフやチェホフの翻訳を発表していた作家に、二葉亭四迷の友人である嵯峨の屋おむろがいる。彼はクルイロフの寓話を紹介したある評論の中で、クルイロフの言語と思想にはロシアという特性が固着しており、その作品にはロシア人独特の思想いわゆる「民性」が民衆の言葉によって表わされているが、それだけに外国語への翻訳は至難であると評している⁸³。『林巨正』の中にできるだけ民族情緒をこめるよう努力したという作者自身の言葉、作品中に挿入された民話、また彼が農民の言葉のもつ表現性の豊かさに注目していたこと⁸⁴などを考えあわせると、洪命憲は言語のもつ民族性にこの当時から関心を持っていたことが推測されるのである。

3月号掲載の⑧「書籍에對한古人의讚美（十三則）」は、いかにも読書家の洪命憲らしく、書物の素晴らしさを賛美した偉人たちの言葉を紹介したものである。末尾で洪命憲は、これが坪内逍遙の著作『文学その折々』⁸⁵からの重訳であることを明らかにし、今後も自分が本誌に出す西洋ものは重訳とみなしてよいと書いている。翻訳よりも翻案が多かったこの時期に、原著を明らかにして正確を期すのは他では見られない態度である。クルイロフの場合と同様、シェイクスピアとミルトンについても生年月日をふくむ註がついている。註のついた文献は開化期には他に例がないという⁸⁶。

⑨「사랑」(愛)は、二葉亭四迷がポーランドの友人に頼まれてある雑誌に翻訳発表した、ポーランドの詩人ネモエフスキーの愛国的な散文詩の重訳である⁸⁷。姜玲珠は二葉亭の日本語訳と洪命憲の重訳を比較してそれが直訳ではないことを証明してから、洪命憲の朝鮮語訳は字数の変化が多いにもかかわらず安定感のあるリズムをたもち、口語を駆使して絶妙な柔らかさを持った表現に成功していると絶賛している⁸⁸。詩の内容は、幸せな幼児期、苦しい青春時代をおえて中年に入った詩人が、早くも生え始めた白髪を見て愕然としながらも、祖国の景色を眺めつつ、「ああ、皆、しかし、この為だ、私はこれが愛しくてならぬ」と幸福を感じ、祖国への愛を自らに確かめるというものである。前文で洪命憲は、「愛読して数年になるが、今でもなぜか、読めば心臓が早鐘を撃つように躍るのは以前に

まさりこそすれ劣らない」と書いている。この詩の載った「少年」第3年第8巻は治安妨害と認定されて1910年8月26日付けで発売頒布を禁止処分となり押収された⁸⁹。そして29日に韓国は日本に併合される。

おわりに

以上、1906年から10年まで、洪命憲の4年間の東京留学時代を、生活、学校、読書、著作を通して概観した。この時期は、日清・日露戦争に勝利した日本がアジアの他国に対して抱いた驕りがアジア留学生の体験からも見えてくる、そんな時期であった。自然主義文学が最盛期を迎え、社会主義思想が広まりはじめ、1910年の朝鮮併合と大逆事件を頂点として明治から大正時代へと移行する、ある意味で日本の曲がり角ともいえる時期である。この時期に洪命憲は東京で様々な知識を得、文学と出会い、自分でも初歩的な文学活動を始めた。筆者のこの後の課題は、彼が東京留学を終えて18年後に書き始めた大作『林巨正』の中に、この時期の彼の体験が、いかなる様相で現れるかを考察することである。

※本稿は文部省科学研究費補助研究（平成11年度～13年度）基盤研究（B）（1）「朝鮮近代文学者と日本」（研究代表者・早稲田大学・大村益夫）による研究成果の一部である。

注

- 1 1985年8月に사계절社から9巻本で刊行され、1991年に10巻本に改版されて、2000年4月現在3版10刷を出している。
- 2 洪命憲は『林巨正』を書くとき「民族の情緒」を表そうと努力したと語っている。「兪鎮午와의対談」, 「朝鮮日報」1937.7.16～18, (林榮澤・姜玲珠編『碧初洪命憲 < 林巨正 > 의研究資料」, 사계절, 1996, p.169, 以下『資料』と表記する) / 「文学談議」, 「大潮」, 1946.1, (『資料』 p.190)
- 3 李孝石, 『林巨正』広告, 「朝鮮日報」, 1939.12.1, (『資料』 p.281)
- 4 金南天, 同上 (『資料』 p.283)
- 5 1992年から「歴史批評」誌に「碧初洪命憲」の掲載を始め、1999年にはそれらをまとめ補完して『碧初洪命憲研究』（創作斗批評社、以下『研究』と表記する）として刊行した。この他に林榮澤と共編の『「林巨正」의再照明』（사계절, 1988）や上記『資料』がある。
- 6 白丁（백철）は屠牛業者および柳器製造者の賤称。『林巨正』では主人公の親が屠殺業者に婿入りした柳器製造者という設定になっているが、矢沢康祐論文「林巨正の反乱とその社会的背景」では、林巨正は柳器製造者と推定されている。（『朝鮮歴史論集上巻』龍溪書舎, 1979）
- 7 「『林巨正傳』에 대하여」, 「三千里」創刊号, 1929.6
- 8 廉武雄・林榮澤・방성완・崔元植 「『林巨正』連載60周年記念座談会」, 前掲『「林巨正」의再照明』, p.58～70
- 9 1946年1月に行われた雑誌「大潮」の文学談議の席上で李源朝が行った指摘に洪命憲も同意

- している。(『資料』 p.190) / 한창엽 『林巨正의 서사와 패로디』 <第3章 1. 「水滸伝」의 關係> 国學資料院, 1997
- 10 『韓國人名大事典』, 新丘文化社, 1986
 - 11 「自叙傳」, 「三千里」 創刊号, 1929.6, p.12 (ただし「三千里」は金英植編図書出版한빛影印本)
 - 12 同上
 - 13 洪起文 (ホン・ギムン 1903~1992 号: 袋山) 国語学者, 古典研究家。父と同年に越北し, のち社会科学院副院長, 祖国統一民主主義戦線中央委員長などを歴任, 「朝鮮実録」完訳も行った。
 - 14 「그들의青年学徒時代」, 「朝鮮日報」, 1937.1.5
 - 15 「自叙傳」, 「三千里」第2号, 1929.9, p.26
 - 16 「春園文壇生活二十年을機會로한文壇回顧座談会」, 「三千里」1934年11月号
 - 17 「自叙傳」, 「三千里」第2号, 1929.9, p.27
 - 18 その前年(1905年)に同じく船で来日した文一平は「釜山で不定期船に乗って神戸で下船して東京に行った」と書いている。(「나의東京留學時代」, 「朝光」, 1933年3月) 洪命憲も大阪ではなく神戸で下船した可能性が高い。
 - 19 「自叙傳」の中には李大容・李海中・河熙源という名前が見える。(「三千里」第2号, p.28)
 - 20 文一平 (ムン・イルピョン 1888~1939 号: 湖岩) 言論人, 教育家, 歴史家。李光洙とは明治学院中学の同級。洪命憲と終生の友人だった。
 - 21 前掲「文壇回顧座談会」/ 「多難한半生의途程」(「朝光」1936年4月, 「李光洙全集第14巻」, 三中堂, p.303) では「玉津館」になっている。場所は不明。大正時代に名の知られた「玉津館」という旅館兼下宿が神田区猿樂町にあったが, 住所からしてそこは違うようだ。周恩来はこの玉津館に泊まって宿代に苦慮したことを日記に書いている。(「周恩来/十九歳の東京日記」小学館文庫, 1999, p.35)
 - 22 東洋商業専門学校は1904年(明治37年)に設立された日本で最初の商業専門学校である。昭和46年に普通科を新設し, 47年に名称を東洋高等学校とあらためて現在に至っている (<http://www.schoolguide.ne.jp/toyo/01.html> 東洋高等学校のホームページ)
 - 23 現在は三鷹に移転して大成高等学校になっている。なおこれらの学校は明治・大正時代の地図で確認できる。
 - 24 「自叙傳」, 「三千里」第2号, 1929.9, p.27
 - 25 上垣外憲一「日本留学と革命運動」東京大出版会, 1982, <第2章 中国留學生の日本派遣>参照
 - 26 1902年には二百数十名であった留學生数は, 1905年(科举廃止の年)には一万人前後に膨張していたという。(巖安生「日本留学精神史」岩波書店, 1991, p.64)
 - 27 上垣外憲一「日本留学と革命運動」p.134
 - 28 「洪命憲・薛貞植対談記」, 「新世代」23号, 1948.5, (『資料』 p.213)
 - 29 同上
 - 30 崔南善の伝記『六堂崔南善』(趙容萬著, 三中堂, 1964)によれば, 留學生は政府高官の子弟の年長者で, 学校で学んだ経験のない者ばかりだったという。
 - 31 上垣外憲一「日本留学と革命運動」, p.133
 - 32 巖安生「日本留学精神史」, <第3章「人類館」現象と「遊就館」体験>参照。1903年大阪

- 博覧会で纏足女性が見本にされたことに中国人留学生が憤激した事件があげられているが、1907年の東京博覧会では朝鮮女性が見本にされたことに対して朝鮮人留学生が抗議し結局篤志家の協力をえて女性を帰国させている。（『太極学報』第11号，1907.6）
- 33 洪碧初・玄幾堂対談中の女の言葉（『資料』p.178）／趙容萬『六堂崔南善』，三中堂，1964，p.59など
- 34 「自叙傳」，「三千里」第2号，1929.9，p.29
- 35 「魯迅選集第2集」，岩波書店1985 p.248
- 36 「自叙傳」，「三千里」第2号，1929.9，p.29
- 37 記事と写真は布袋敏博氏が見つけて下さった。布袋氏に心より感謝する。
- 38 「自叙傳」には「泰仁郡守」とあるが，泰仁は全羅道。洪命憲が3，4年生のころ父は泰仁郡守であった。
- 39 李光洙『나의告白』（1948），「李光洙全集第13巻」，三中堂，1962，p.192
- 40 前掲書，p.193。『나의告白』には，洪命憲の父親の殉死を乙巳保護条約の時にするなど，記憶の錯誤も見られるが，当時の雰囲気はよく伝えている。
- 41 「洪命憲・薛貞植対談記」（『資料』p.216）
- 42 洪命憲は卒業試験を受けなかったが，普段の成績が優秀であったので，大成中学では彼の卒業を認めて卒業証書を郵送した。大成中学は，現在大成高等学校となって三鷹に移転しているが，洪命憲の名前は卒業者名簿に載っているという。（姜玲珠『研究』p.73脚注）
- 43 「그들의青年学徒時代」，「朝鮮日報」，1937.1.5
- 44 日本語試験の結果，最年少の崔南善が最高点で班長になったが，寮の二階から放尿したり夜の盗み喰いをする仲間のために代表として学校側から叱責を受け，遊郭通いで病気を得た仲間の治療に同行せねばならないなど，耐え難いことが多かったためという。（趙容萬『六堂崔南善』，三中堂，1964，p.57）
- 45 「六堂崔南善全集第15巻」（玄岩社，1975）所収の年譜および前掲『六堂崔南善』の記述によれば，崔南善は1906年3月に留学し，その年6月に起きた早稲田大学の模擬国会事件に憤激して在学3ヶ月で同盟退学したことになる。だが同事件が起きたのは翌1907年3月である。早稲田大学の大村益夫・布袋敏博両氏の調査によると，崔南善の学籍簿は消失しており，入学原簿には明治39年9月高等師範部歴史地理科入学，明治40年12月同退学となっているが，高等師範部の発足は明治40年7月とのこと。『太学報』第2号（1906年9月24日発行）に崔南善が「牛込区早稲田専門学校」に入学したという記事が見えるので，1906年9月に専門部に入学し，翌年9月に高等師範部に移ったのではないかという。その他に，崔南善自身の回想として，「17歳のとき，日本で大韓留学生会報を1，2ヶ月出したが，途中病気で呻吟し，結局帰国するはめになって，月報もそのまま終わってしまった」という「少年」1909年6月号の「少年時言」がある。崔南善の第2次日本留学については現在のところはっきりしていない。
- 46 姜玲珠『研究』p.54
- 47 「六堂崔南善論」付記「六堂의 첫 印象」（『朝鮮文壇』第6号，1925.3）で李光洙は，1909年11月28日（日曜）の夜，洪命憲の紹介で崔南善に会ったと，日記を引用した形で述べている。ところで，同じ『朝鮮文壇』6号および7号に李光洙は「日記—18歳少年が東京で書いた日記—」を発表しているが，「日記」の同日には崔南善に会ったという記述はない。「日記」と「六堂의 첫 印象」を比べると微妙に食い違う部分がある。「日記」の方はあくまでも創作作品

- とみなすべきであろう。(目次では<創作>欄に入っている)
- 48 「多難한半生の途程」(「朝光」1936年4月,「李光洙全集第14巻」,三中堂,1962,p.303)。なお「少年」2月号に洪命憲は假人の号でクレイロフ譬喩談の抄訳,李光洙は孤舟の号で「幼い犠牲」を書いている。
- 49 このとき学費中断に憤激した一進会留學生が断指事件を引き起こして世間の同情を呼び、皇帝勅令により官費が支給されることになった。金允植『改訂増補 李光洙斗 그의時代』(倉出版社,1999)に引用されている資料,「大韓留學生會學報」によると,政府は3年限って学費支給をすると決定しているので,李光洙は期限内に中学校を卒業するためには3年編入が不可欠であったことになる。
- 50 洪命憲は3年生の冬休み頃から文学に親しむようになった。李光洙の方は,明治学院に編入した3年2学期の秋に読んだ木下尚江の『火の柱』をきっかけにして読書に没頭するようになった。(拙論「獄中豪傑の世界」註44参照。「朝鮮学報」第143輯,1992)
- 51 「洪命憲・薛貞植対談記」(『資料』p.216)。なお李光洙は,一進会の留學生として来日したとき毎月20円給付され,官費で再来日したときも卒業まで同じ額を給付されたという。(「나의四十半生記」,「新人文學」8月号,1935.7)
- 52 1941年8月「朝光」の「洪碧初・玄幾堂対談」で,司会の李源朝の「(留学当時は・・引用者)文学青年は多かったですか?」という問に,洪命憲は「いませんでした。大概是法律の勉強をして官吏になろうとしていましたから」と答えている。(『資料』p.177)
- 53 李光洙「多難한半生の途程」『 그의自叙傳』『나의告白』『나』『文壇生活三十年』など
- 54 李光洙『나의告白』,「李光洙全集第13巻」,三中堂,1962,p.209
- 55 李光洙「多難한半生の途程」,「李光洙全集第14巻」,三中堂,1962,p.395
- 56 李光洙『 그의自叙傳』,「李光洙全集第9巻」,三中堂,1962,p.327
- 57 金允植「改訂増補 李光洙斗 그의時代」年譜の記述による(倉出版社,1999)
- 58 秋山繁雄「学院出身の作家山崎俊夫」,明治学院「白金通信」第138,139号,1980
- 59 「大トルストイの人物と作品」,「朝鮮日報」,1935,(『資料』p.83,4)
- 60 拙論「獄中豪傑の世界」,「朝鮮学報」第143輯,p.70
- 61 登場人物の名前に,李光洙が中学校在学時に使っていた幼名「李宝鏡」が使用されている(「帝国文学」1月号,1914,『山崎俊夫全集上巻』所収,奢瀾都館,1986)。筆者は以前この作品に言及して,登場する日本人学友たちの態度には「当時の李光洙をとりまいていた陰った雰囲気想像させるものがある」と指摘した。(「李光洙の自我」,「朝鮮学報」第139輯,1991,p.76)
- 62 「京城の空の下」,「食味評論」,1956(昭和31)年4月号,前掲全集補巻一,p.100
- 63 「政界往来」1968(昭和43)年5月号,前掲全集補巻一所収
- 64 「自叙傳」,「三千里」第2号,1929.9,p.27
- 65 「洪碧初・玄幾堂対談」(『資料』p.179)
- 66 二葉亭四迷訳,金尾文淵堂,1908(明治41)年9月
- 67 「洪命憲・兪鎮午文学対話」,「朝鮮日報」,1937.7(『資料』p.171)
- 68 「洪命憲・薛貞植対談記」(『資料』p.215)
- 69 「洪命憲・兪鎮午文学対話」(『資料』p.171)
- 70 同上
- 71 「洪命憲・薛貞植対談記」(『資料』p.215)

- 72 「洪碧初・玄幾堂対談」(『資料』 p.177) ここでは洪命憲は「カイン篇」と言っているが、実際に読んだのは1907(明治40)年1月発行の木村鷹太郎訳『天魔の怨』(二松堂岡崎屋)だと思われる。
- 73 中国に行ってから中国語の発音に合わせて<可人>と変えたという。(『資料』 p.177)
- 74 『그의自叙傳』,「李光洙全集第9巻」,三中堂,1962, p.304/『文壇回顧座談会』,「三千里」1934.11, p.236 その他
- 75 「獄中豪傑の世界」,「朝鮮学報」第143輯,1992
- 76 「押付女房」,金尾種次郎,明治41年1月/風俗壊乱,「現代筆禍文献第年表」1932,『齋藤昌三著作集第2巻』,八潮書店,1980
- 77 クロポトキン原著,平民社訳,明治42年1月/治安妨害(同上)
- 78 「新小説」第14巻第10号,昇曙夢訳,春陽堂,明治42年10月(同上)
- 79 『ふらんす物語』は明治42年1月,納本手続きと同時に発禁になり,一部余さず押収されたというから,洪命憲や李光洙はそれ以前に「早稲田文学」等の雑誌に発表されたものを読んだのだろう。(『続発禁本』城市郎,桃源社,1965, p.51)
- 80 前掲「現代筆禍文献第年表」参照
- 81 山田豊彦訳『クロイロフ物語(新伊蘇布)』,大盛堂,1914(大正3)年
- 82 クロイロフ寓話203編のうち37編はイソップとラ・フォンテーヌの寓話から題材を得たものである。(岩波文庫,内海周平訳『完訳クロイロフ寓話集』,訳者あとがき)
- 83 「寓意の作家クルイローフ」,「國民新聞」,1891(明治24)年4月(「明治文学全集17巻・二葉亭四迷/嵯峨の屋おむろ集」 p.357)
- 84 「碧初洪命憲先生을 둘러싼文學談議」,「大潮」創刊号,1946.1(『資料』 p.203)
- 85 坪内逍遙の『文學その折々』は1896年9月春陽堂から刊行されたが,1909年8月に改訂4版が出ているので,それを入手した可能性もある。
- 86 金秉喆「韓国近代西洋文学移入史研究(上巻)」,乙西文化社,1989, p.40
- 87 「世界婦人」,明治41年3月(岩波書店「二葉亭四迷全集第8巻」所収)
- 88 『研究』 p.80~81
- 89 「少年」第3号9巻に「愛読列位に謹告す」として官文書がそのまま掲載されている。